

## 下呂シンポジウム報告

高橋 卓也（滋賀県立大学）

岐阜県下呂市は、2004年に旧益田郡の荻原町、小坂町、下呂町、金山町、馬瀬村の5町村が合併して誕生した。面積は851km<sup>2</sup>、そのうち91%を森林が占める。市の中央部を飛騨川が流れ、西部を馬瀬川が流れている。人口は2000年で約4万人である。

岐阜県下呂市では、内陸部での溪流魚つき保全林という全国でもまれな取組みが展開している。森林法に基づく「魚つき保安林」制度は、海岸部に適用されることがほとんどであるのに対し、ここでは内陸の溪流沿いに適用されている。また、「魚つき保安林」は国の法律にのっとった規制であるのに対して、下呂市の魚つき保全林は、地方自治体（旧・馬瀬村）が地域創りを目指して、個人、県、国有林などと協力関係を構築したものである。溪流魚つき保全林のほかにも下呂市では、森と水を題材としたさまざまな地域創りの動きが見られる。それらの動きに新たな方向を見出すため、本シンポジウムは水資源・環境学会と下呂市との共催で開催された。以下、シンポジウムの内容を時系列に沿って報告する。

[6月3日・第1日目]

【第1部「豊かな森と水を活かす地域創りワークショップ」】

山田良司氏（下呂市長）と仁連孝昭氏（学会事務局長；滋賀県立大学）からの挨拶によってワークショップは開幕した。参加者は、下呂市のNPO、産業関係者、市役所担当者、県の森林担当者、国有林担当者、そして水資源・環境学会員の合計約40名である。小池永司氏（下呂市・元収入役）から下呂市の旧・馬瀬村での川を中心とした村の活性化についての説明をいただいた。ふるさと創生基金を利用して作った温泉が功を奏し、それ以前は5万人程度の釣り客が35万人へと急増した。結果、山菜採取、釣りのマナーについて問題が発生するようになった。平成6年から村づくりの研究会がスタートした。同年から森林と川と人間の深いつながりに着目した6つのプロジェクト（エコリバーシステム活性化プロジェクト）が立ち上げられている。合併の1年前には馬瀬地方自然公園作り宣言が出され、現在は協議会作りの段階に入っている。

そのあと、ワークショップにふさわしく多彩な意見・問いかけが出された。ワークショップのために用意された4つの課題によって羅列的ではあるが整理を試みたい。

1. 新下呂市における地域づくりの課題を明らかにする。

タイトルにある森林、河川の管理のありようについてとくに多くの課題があげられた。具体的には、人工林での間伐の遅れ、森林の目指すべき将来像、河川の水位調整（漁業とダムとの関係）、生活排水・農業排水についての問題点があげられた。農林業の経営困難もそれらの背景として重要である。

2. 地域づくりにとってどのような資源があるか？

保水性の高い火山岩によってきれいな水質が維持されている。カラマツの林も新鮮な目で見ると「海の色」が発見できる。桜が水田の水面に映るのも感動させられる。下呂市の標高差は大きく、植生が多種多様である。紀元前1000年から500年に作られた巨石遺構も観光資源として活用できるのではないかと。

3. 地域資源をつないでどのようなアクションが可能か？

5,000km<sup>2</sup>という広大な木曽川上流域のうち6分の1が新・下呂市となっている、この力を使えば圧力団体になれるのではないかと。現状の若齢人工林が主体の森林を高齢林または広葉樹主体のものへと転換しなくては水環境の保全ができないのではないかと。上流下流を結ぶ環境教育が可能では。

4. 内陸型国内唯一の「溪流魚つき保全林」のあり方？

魚つき保全林については、従来の国の制度「保安林」との違いが明らかにされた。つまり、所有者の行動に規制をかけるものでなく、自発的協力を求める枠組みとして地方自治体独自の「魚つき保全林」という形態が選ばれた、ということである。そのきっかけとし

では、地元での従来の慣行からというよりも、外部からの釣り客の森林に対する高い評価によるものであった。

このワークショップは、参加者間で、下呂市の地域資源とそこから生まれる行動の可能性が共有がなされる端緒となったのではないだろうか。

〔6月4日・第2日目〕

【第2部「地域を再発見するエクスカージョン」】

学会からの参加者15名の多くは地域になじみが少ないため、地域づくりの資源を実地見学する機会を第2日目の午前に用意していただいた。

まず、小川字高洞の棚田である。明治年間から営々と谷底から石を運び上げて作り上げた約3haの棚田群はこれまでとくに注目されずに農業が営まれてきた。下呂の温泉郷を見下ろす棚田には独特の雰囲気があるように思えた。つぎに治水の歴史的建造物・霞堤を見学した。そして、南ひだウッド協同組合を見学。廃材を利用した木材乾燥施設、コンピューター制御のプレカット施設が印象的であった。荻原町四美の南飛騨健康保養地に向かう。同地では「癒しの森」をコンセプトとして元の民家も利用した保養基地を形成中である。最後に馬瀬地区の魚つき保全林を見学した。下呂市の中心部から山を越えた別の谷に馬瀬地区はある。途上、間伐の行き届いた人工林が印象的であった。来年下呂市で開催される全国植樹祭にあわせて道際を間伐しているとのこと。点在する馬瀬の集落を縫う幹線道路を離れ、林道を10分ほど上ったところで駐車、黒石水源のもり地区の砂防ダムを見下ろす地点で国有林の方々より魚つき林の管理方針につき説明を受ける。雨模様であったが、緑の淵を広葉樹が覆っていて爽快であった。シンポジウム会場（ホテル美輝）へ向かうバスからは、生物多様性、溪畔森林の保全を目的とした治山モデル事業（岐阜県実施）の現場（馬瀬地区葛谷流域）を遠望することもできた。

短時間にもかかわらず行き届いた計画のおかげで、下呂市の森と水の重要なポイントを実見したうえで、第3部のシンポジウムに臨むことができた。

【第3部「豊かな森と水を活かす地域づくりシンポジウム」】

参加者は、下呂市民（多くは馬瀬地区の住民）、行政関係者、当学会員、あわせて約80名である。市長代理と菅原正孝学会長（大阪産業大学）からの挨拶の後、千頭聡氏（学会員；日本福祉大学）の基調講演「森と川そして暮らしはつながっている」をうかがった。まずは、身近な例をあげつつどこに問題点があるのかを指摘された。都市住民と川とはつながっていない。都市住民と山とはつながっていない。そこでどうすればよいのか。キーワードは「循環」である。ヒントとして、映像での地域の文化の記録、ヨソモノの視点の導入などを紹介された。最後に千頭氏の馬瀬地区への思い入れの発端として木馬（木橋）による木材搬出の話題が紹介され、木馬についてのワークショップを開催してはとの提案をされた。

基調講演に引き続き、パネルディスカッションでは仁連事務局長のコーディネートで各パネラーからの地域づくりへの示唆、提案がなされた。パネラーごとに発言内容を紹介する。

井口貢氏（京都橘大学）：観光文化政策の視点からの提言。観光は一人十色であり、ホンモノへのこだわりが必要、ヒトが主役の交流産業である。好例が愛媛県内子町にある。内発的開発、コミュニティービジネスが実践されている。（詳しくは氏の著書をご参照下さい。）

平部恵子氏（劇団ふるさときゃらばん）：取材をもとにしたミュージカルを続けて22年目になる。これまで、農家、サラリーマン、環境を描いてきた。なぜ農家を描くのか。それはそこに愛と自然があるからだ。

永井博記氏（アジア協会アジア友の会）：水にかかわる井戸を海外に援助している。水の根源として森に目を向け、植林にも国内外で取り組んでいる。災害を受けたバンダアチエに新しい村を作ろうとしているところである。是非応援してほしい。

小池永司氏（下呂市・元収入役）：平成6年から森と川をテーマとした村づくりをしてきた。魚つき保全林については5年かかって実現ができた。人間は美しさには感銘を受け、との考えのもと、山村景観の改善に取り組んでいる。馬瀬十景を指定し、道路沿いの森林を間伐し、ガードレールを自然に馴染む色へ塗り替え、村内の看板のデザインを刷新した。

千頭聡氏：沖縄の東村では「自分たちで自分たちの村について語れる」ということを大事にしている。人に伝えることから第3次産業が生まれ、お嫁さんも来るようになる。

会場との質疑応答では大学の教員へ「いつ学生たちと来てくれるのか」との問いかけもあり、今後の交流への足がかりができたようであった。

短期間ではあったが、下呂市の魅力的な森林、水、人について学ぶことができた。ご尽力賜った地元の方々、そして今回のシンポジウム開催の原動力となった川合千代子会員に深く謝意を表したい。